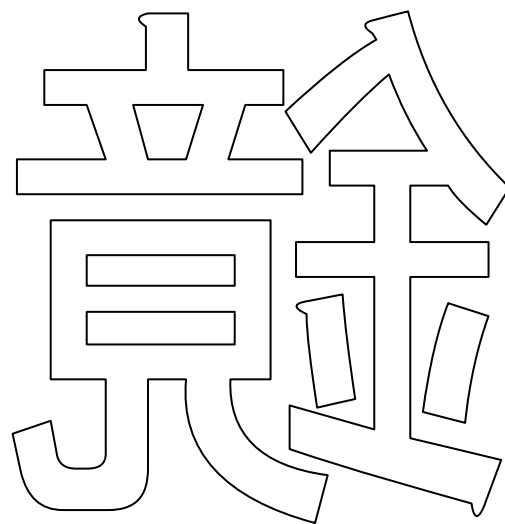




今週も12作品の熱いラッシュ。

2分割にてお届けします。

惜しい作品/全作品講評と順位/受賞発表は

「補足資料」にてお楽しみください。

世界で一番大きな鏡

それは世界で一番大きな鏡  
太陽を映し、月を映し、星を映す

それは世界で一番大きな鏡  
空を映し、雲を映し、鳥を映す

それは世界で一番大きな鏡  
朝を映し、昼を映し、夜を映す

それは世界で一番大きな鏡  
風と共に流れ、雨と共に乱れ、時につれ満ちる  
その鏡の名は海  
地を見守り、生命を支え、人を育む  
世界で一番大きな鏡

事実を真実と誤認してはいけない。  
それが解法への近道である。

(Hop.N.Mark / truth in mirror)

### 【カガミの真実】

ストーカーだ、と浩二は思った。

このご時勢に他人を付け回す人物は、彼の脳内辞書では『ストーカー』という単語以外に該当しない。『探偵』ならば気配を消して尾行するにとくらいわけない、と彼の辞書には記載されている。

浩二はまたとない緊張感を抱きつつ、弱い街灯に照らされた夜道を歩く。しばらくしたら止まり、また歩く。そして、もう一度止まった。

カッン・

一拍遅れた足音が反響する。

浩二は少し不気味に思った。

十十

その日も同じく、一拍遅れた足音が浩二の耳に届く。しかも、いつも以上にはつきりとしていた。

状況が状況だけに、普段よりも感覚が敏感になっているのだろう。このように浩二は思うことにした。

そのせいなのか、見えてしまった。

本来は暗闇で見えないはずなのに、偶然に偶然が重なったのか、ともかく見えたのだ。カーブミラーに映る、髪の毛の長い女性の姿が。

十十

世間的な評判どおり、ストーカーが徐々にエスカレートしていった。ピンポンダッシュや監視、手紙、電話、その他諸々と、日を追うごとに酷くなっていく。

浩二には気の抜けない毎日だった。よくも飽きもせずに犯罪行為を続けられるものだ、と表面的には見下しつつも、本当は弱音を吐きたかった。

脳裏には、あの女性の姿がしっかりと焼き付けられていた。

十十

半月ほどストーカーが続き、ようやく逮捕された。

張り詰めた日々は終わりを告げて、浩二は一息をつくことができた。

この日以来、浩二はあの女性を見かけることはなかった。

~~~~~

ニュースをお伝えします。

今日未明、東京都世田谷区で無職の男がストーカーの容疑で逮捕されました。逮捕されたのは加賀見浩二容疑者（38）で――。

## 魔鏡

家にある鏡を覗いてみると、そこに、あるはずの無いものが映っていた！  
さあ、あなたはどうしますか？ 超常現象が起こったと騒ぎ出すでしょうか。それとも、静かに念仏でも唱えて、静まれ静まれともいうのでしょうか。

こんな話は、実際にあるわけが無い。そう思う人は決して少なくは無いと思いますが、今回ご紹介する話は、まさに、そんな魔鏡の話なのです。つまり、鏡から勝手に像が浮かんでくるような、そんなお話です。

江戸時代。ご存知のようにキリスト教は禁止されました。キリスト教徒たちは隠れキリシタンとなって、キリスト教の信仰をやっていました。もちろん、国で禁じられた宗教ですから、そんなに簡単に十字架などをもっているわけにはいきません。そこで、とある銅鏡に向かって祈りをささげていたのです。

そんなときでした。光が少し差し込んだ瞬間、鏡の前にある畳にキリストの像が写ったのです。誰も影をつけたわけでもなく、鏡が汚れていたわけでもありません。なのに、キリストの像がそこに浮かんだのです。キリシタンたちはその銅鏡が奇跡の銅鏡であると信じ、祈り続けたそうです。

実は、この銅鏡こそが、魔鏡です。実際には、何の奇跡も起きていません。ただ、こういう銅鏡を誰かが手に入れていた、というそれだけの話です。ちなみに、鏡は神道でもご神体となっている神聖なものなので、それ自体からキリシタンの疑いが出るわけではないです。この鏡は、当時のキリスト教信者にとってはかけがえのないものであったに違いありません。

さて、それではこの魔鏡、どういう仕組みで何の変哲も無いはずの銅鏡の反射光に像を作らせるのでしょうか。実は、この鏡の表面には、近くでは容易にわからないくらいの細かな凹凸が付いています。どのくらい細かいかと言うと、大きくてもおよそ15ミクロンというのですから、人間が完治できるものではありません。ここに光があたると、凸の部分に当たった光は散乱し、凹の部分に当たった光は集められます。しかし、凸凹は小さいので、近くで見ると普通の鏡、遠くに反射光を映すと影響が強くなって像が写る、とこういう仕組みです。

仕組みは分かりましたが、これ、結構作るのが大変でして、青銅鏡を作ったら、裏側から写したい模様を彫り、かなりの薄さまで磨かなくてはけません。これによって、磨く際、表側に裏側の影響で細かな凹凸ができ、魔鏡が完成するというわけです。

この魔鏡は実は長らく作られていませんでした。銅鏡ということ、需要が少なく、非常に手間がかかるので忘れ去られていたのです。しかし、京都の職人さんが昭和49年にこの技術を復活させ、現在ではここで魔鏡が作られています。

とても不思議な魔鏡。現在では日本の職人芸の極みをあらわすものになり、さらに、この磨く技術は半導体技術にも応用され、ITをも支える、なくてはならないものになっています。昔から人々をいろんな形で支えてきた魔鏡には、何か不思議な力を感じてしまうのは私だけでしょうか。

## 大きなほくら

僕の頬にはたいへん大きな黒い物が付いている。鏡でうつしだすたびにその大きさに僕も悲しくなってくる。僕は、「ほくらがなければ自分はどうなにするばらしい人生が送られたものか」と思っていた。友達には、いつも「お前の顔には虫が付いているな」などとからかわれていた。さらに、町を歩くと見知らぬ人にくすぐす笑われた。僕のほくらはいつのまにか町の名物となってしまうていた。

ある年、町を大きな地震がおそった。たぶん、震度6強ぐらいだったと思う。学校の校舎、周りの家々、商店街の建物は、総崩れ。僕の知り合いも何人か亡くなった。町の人々は、一時、着の身着のまままで町を出ざるをえなかった。僕も家族で町を離れた。三ヶ月後、避難命令は、解除された。僕ら町の人々は、町に戻ってきた。しかし、町には、全く活気がない。町の人々は、悲しみ、疲れていた。

そんなある日、友人の竹中君に、

「ギネスを知っている」と聞かれた。

「あつ、それって、世界一の記録が書かれている本でしょ。世界一背の高い人とか、世界一鼻毛が長い人とか」

「君のほくらで出してみたら」

「俺をからかっているのか」

「違ふよ。もしギネスに載れば町に活気もどってくるし。さらには、お前は  
この町のヒーローになれるかもしれないぞ」

単純な思考回路しか持っていなかった僕はすぐに友達の話に乗った。

四ヶ月後ギネス社から手紙が来た。なんと、世界一大きいほくらで僕のほくらが登録された。町の人々は、喜んでくれた。町からは、暗い雰囲気が消え、うすい明るい光が差し込んだ。僕もうれしかった。僕は、自分のほくらを鏡でもう一度見た。そして、触りながらこう言った。

ほくら君ありがとう

## 目の前の女

「うしろのしょうめんだーれ？」

薄暗い夜の病棟の女子トイレ。大きな鏡の前に写り込んでいる目の前のショートヘアの女がそうつぶやいているのを見ていた。とたんに、自分で言って恥ずかしくなってしまうた。ばかだなあ。こんな話嘘に決まっているのに。

私がこの話を聞いたのはこの病院に赴任してすぐだった。といっても、まだ赴任して一週間なのだけ。鏡の前でそうやって言えば血まみれのメスを持った髪の長い女が後ろから現れて、殺されるんだって。なんでも、顔を薬品で焼かれて自殺してしまった看護婦の霊で、嫉妬にも妬かれて若い看護婦を殺すらしい。なんのことはない、どこにでもあるような怪談話だ。22歳にもなつて信じる方がおかしいでしょう？

ふと、小さい頃は怖がりだったなあと思い出した。ロさけ女の噂が絶盛期だったころ、人気のない夜の道は「ボマード、ボマード」と念じながら全速力で帰っていたものだ。といっても、ロさけ女は100メートルを3秒で走るらしいから、いくら速く走っても無駄、ただけだね。そのまま持つてる鎌で殺されちゃうんだ。

そういえば、昔から大きな鏡は何か怖かったなあ。だって、もしかしたら、常識的に考えてあつてはいけないものが写っているかもしれないじゃない・・・

トイレに響いているのはジャーという水の流れる音だけ。

手を洗い終え、蛇口を閉めると、音が、消えた。

なんだか空間が広がったような感じがした。

鏡の上の蛍光灯が切れかけている。ちか、ちかちか、ちかちか  
ふう、あたし疲れてるのかなあ。なんだかとても体が重い。

再び、蛍光灯から目の前の大きな鏡が写し込んでいる、髪の長い女に視線を戻す。

さーと肩から背中にかけて血の気が引いていき、後を追うように鳥肌が立っていくのを感じた。

どん、どん、どん、どん。心臓が痛いほど胸を打ち付けている。頭はまだ追いついていない。あたしってこんなに髪長かったっけ？髪を触ろうと手を挙げようとしたが、目の前のショートヘアの女は顔を引き曇らせるだけで微動だにできないようで、気づくと代わりに女の頭の後ろから、長い髪の女顔が現れていた。顔は、なかった。だが、にやりと笑っているのがわかった。

息ができない、どん、どん、気持ち悪い、どん、どん、お願い、どん、どん、やめて、どん、どん、夢でしょ？

私は耐えきれず目を閉じ、そして、自分の過ちに気づいた。

ばかだなあ。無駄だよ。目は閉じたらあけなきゃいけないんだよ。

黒い世界の中に真つ暗な絶望が広がった。

闇に耐えきれずに、私は眼を開いた。

ああ。目の前に髪の長い女がいた。

我が家には、代々伝わる古く奇妙な化粧台がある。扉を開くと、十分後の様子が映し出されるという摩訶不思議な「鏡」がそこに現れる。その秘密を知っているのは代々この家を継いできた、私を含む女たちだけであった。

## 十分後 Ten minutes later

ある日、私がその鏡を掃除していると、突然鏡に血まみれになった私の姿が映った。どうやら私は、十分後に背中に包丁を刺されて床の上に倒れてしまいうらしい。返り血が鏡にも跳ねてきて、せっかく掃除したばかりの鏡が汚れてしまった。その死んだ私の背後を覗いてみると、顔に満面の笑顔を浮かべている私の夫が映っていた。まだ三十代半ばのくせに、だいぶ脂ものつて、老けた顔をしている。にやけた顔を見ると、いつも私は全身に不快感を覚える。

何を考えているのかわからない性格だし、正直言つてウザい奴だ。

なるほど。どうりで最近、やたらと私にアフラッ〇のアヒルのぬいぐるみをたくさん、プレゼントしてくれるなあとと思った。既にそのかわいぬいぐるみは全シリーズ揃つて、十五体もが綺麗にタンスの上に並べられていた。つまり私にはそれだけ多額の保険金が掛けられていたのだ。ようやくそれを理解できた。

彼が私の遺体の処理を始めた様子が映った。まず彼は私を庭に埋め始めた。あらかじめ庭に大きな穴を掘っておいたらしい。抜け目のない奴だ。「実は最近俺もガーデニングにはまってきたんだあ」とかわいく言つて、暇そうに土いじりしてやがるなど思つたら、こんな準備をしたのか。

次に彼は拭き掃除を始めた。床は掃除しやすい材質でできていたので、もちろん普段まったく掃除をしない彼でも、簡単に私の血を拭き取ることができた。

こうして、あつという間に証拠隠滅の作業が終わり、彼は奥のダイニングで好物の紅茶を、のんびりカップに注いで口に運んでいた。優雅なティータイム。

私は間もなく起こる夫の犯行を、すべて鏡を通して覗くことができた。

この鏡の映す「十分後」が真実であることは私も承知の上だ。今更じたばかりでももう遅い。まもなく夫は帰ってきて、保険金目的で私を殺害してしまう。

しかし、このままぬくぬくと殺されるだけでは、どうも私の気持ちは納まらない。負けず嫌いの私だ。ここは引き下がることはできない。

だから、ティーポットの中に猫いらずを入れておく。たつぷりと。

## 昔のお話

むかーしむかーしあるところに  
それはそれは賢い若造がおったそーな。

ある朝、若造はベッドから起きあがり洗面所に顔を洗いにいった。  
若造は鏡の中の自分を見た。

すると若造はふと不思議な気持ちにとらわれた。

その時、洗面所の鏡がゆっくりゆっくり若造から離れていった。

今度は若造も鏡につられるようにしてゆーらゆーら。

鏡はどんどんどんどん速くなる。

若造もどんどんどんどん速くなる。

鏡はさらにスピードを増し、ついに音よりも速くなった。

若造も鏡を追いかけて、音よりも速く飛んでいく。

音は若造に追いつけない。若造に音はほとんど聞こえない。

鏡はさらにスピードを増していく。若造もさらに追いかける。

若造は鏡の中の自分に目を凝らした。

鏡はもつともつとスピードを上げた。

若造ももつともつとスピードを上げる。

鏡が光の速さに近づいた。若造も光の速さに近づいた。

若造はさらに厳しく鏡の中の自分に目を凝らす。

鏡と若造の速さが光の速さになろうとしたとき・・・

バッチイインンン

若造は洗面所の前に立っていた。

私は鏡が嫌いだ。

その前にあるものを飲み込んで、自分のものにする鏡が嫌いだ。どこか冷たくて違和感のある、鏡の向こう側の世界が嫌いだ。

そして何よりも、鏡が映し出す、ありのままの自分の姿が大嫌いだ。

### 面対称の向こう側

私の一日は、ちよつと他人とは変わっている。起きてから寝るまで、全く鏡を見ないのだ。誤解が無いように言っておくが、決して身だしなみがルーズなわけではない。スキンケアに産毛の処理、髪の毛のセットすら、慣れれば鏡なんか無くて出来る。どうしても姿見が必要ときは、夜の窓ガラスを使う。窓ガラスは輪郭をぼやかしてくれるから、なんとか大丈夫だ。

いつからだろう、こうなってしまったのは。微かな記憶の中に、そのきっかけのかけらが残っている。あの日から、きつと私は鏡を怖がっているのだろう。

小学校に入る前だろうか。私は鏡の前に座り、ヘアゴムで遊んでいた。小さな手は、母親の動きを真似て髪を束ねようとするが、細く短い髪の毛はうまく纏まってくれない。友達みたいに髪が長かったら、うまく出来るのに。そう思った私は、振り向いて母親に言った。子供ながらの、無邪気な口調で。

『どうして私は、みんなと違うの』

ただ髪の毛の長さを言ったつもりだった。ただ幼稚園のバッチの色を言ったつもりだった。鏡に映る私の姿は、どこか本当の私ではないような気がした。そうしたちよつとした違和感は、前々から幼い私の中で少しずつ積み重なっていた。その末に生まれた、ちよつとした疑問だった。けれどその質問で――母は号泣した。これが直接の原因となつて、鏡を見ることが出来なくなつたわけではない。ただ、これをきつかけにして鏡を避けるようになったのは事実だ。もつとも、年を追うにつれて大きくなっていく違和感に、私が耐えられなくなった、というものであるのだけだ。

今朝も私は鏡の前に立つことなく、高校へ行く支度を整える。歯を磨いて顔を洗い、髪を整えた後、制服に着替える。少し時間が余つたので、テレビを眺めた。お気に入りの俳優が結婚するらしい。かっこよかったのに。すこしショックだ。テレビを消して、玄関に向かう。ローファーを履き、「いつてきまーす」と声を張り上げる。ドアを開けて外に出ると、前髪が上がるぐらいの春風。家の前の通りを、ウチの高校の女の子たちが、スカートを抑えながら歩いている。

――チクリ、と胸が痛んだ。

歩く制服たちの中に、見知った顔を見つけ、私は駆け寄る。春風なんか気にしないで、ただ胸の痛みだけをこらえて、むりやり笑顔を作る。後ろから思い切り背中を叩き、いつものように挨拶をする。

「うーす」

私の履いたズボンの裾が、少し風にはためいて、今日も偽りの一日が始まった。

本当は長い髪が良かった。赤いバッチが良かった。スカートを履きたかった。けれど、私がいくら手を伸ばしても、それは手に入らない。まるで、鏡に映った虚像のように、そこにあるように見えても、掴むことは出来ない。

そう。本当に、私は鏡が大嫌いだ。

破片

今日はやけに寒いな。早くうちに帰ってコタツに入ってみかんでも食べようつと！

ドカツ。

イタツ。あの、何か落しましたよ。あの……、あの……。　　つたく、人に当たつたといても言わないなんて！しかも、親切に教えてあげて……、あれ、さっきの髪の毛長い女性はどこ？

でも 何を落としたのかしら？あれ、なんか今光った？か・が・みかな。でもなんか少し欠けてる。それに、この赤いのは何かしら……？

か・お・り……

か・お・り…

え？今確かに香織つて言った？よ・ね？つて事は私の事を呼んでる……？？

急に怖くなり投げ捨てられた鏡。香織を呼んでいる鏡。その鏡は不思議な力を持っていた。普通、鏡の中の自分というのは、こちらの動きに合わせて動く。言ってみれば、鏡の中の自分は、「こちらの動きに操られて」動く。ところが、もし、その逆になったとしたら…。

今の香織にはその恐ろしい事が現実となつてしまつた。そう、あの鏡に触れてしまつたその日から。

あつ、この服かわいい。ちよつと覗いてみようかな？ ん？何この感覚？

ショーウィンドーを覗く香織に異変が起きた。ウィンドーに映る自分と目が合うと、突

然香織は不気味な笑みを浮かべた。

何で稀笑ってるんだろ？あれ、体が勝手に動く。なんでバックを開けているんだろ？ん、万年筆を取り出して……え、何してるの私？痛っ！止まんない。痛っ！痛っ！誰か助けて！

突然万年筆で自分の腕を刺し始めた香織。それを見ていた通行人数人が香織を囲むようにして彼女の暴走を止めた。

車や電車、テレビのガラス お風呂や水溜りの水面などに自分の姿が映ったときだけ先のような暴走が起こった。そして、その姿が映らなくなればいつも解放された。

だんだんと自分が操られる時がどういう時  
か分かってきた香織はついに意を決して、事  
の発端となったあの鏡を探すことにした。

ふうい、やっと思つかつた。もしかしたら何か呪いを解く手があるかもしれない。鏡に自分が映らないように注意してつと。なに、何か書いてある。

## 呪いを解く方法

鏡の中の自分の破壊したい部分と同じ部分を使って鏡を壊す事。ただし、その際、鏡が血で赤く染まらなければ無効となる。

香織は全てを悟った。なぜ鏡が欠けていたのか。なぜ鏡に血が付いていたのか。

私、もう決めた！

そして、香織はもう二度と鏡の中の自分に見つからないように、おもいきり自分の両目を鏡に打ちつけた。

## 心鏡

私の心の中にはきつと鏡がある

その鏡のせいで 思っている事と反対の事をしてしまう

あなたに近付きたくて 傍に寄ろうとしても  
どうしてなんだろう 逆の方へ行ってしまう  
それじゃ きつきより離れちゃうのに

あなたと手を繋ぎたくて 右手を伸ばそうとしても  
どうしてなんだろう 左手しか動かないよ  
それじゃ あなたはその左手に噛み合わないのに

あなたへの気持ち伝えたいのに  
鏡は私の姿を映すから

あなたは本当の私に気付いてくれない

こんな鏡なんて早く割ってしまいたい

だけど 破片が心に突き刺さりそう  
怖くて自分では割れないよ

あなたがまっすぐぶつかって来てくれたらいいのに  
そしたら鏡があっても関係ないから

だけどそれって……逃げだよ

# MAN IN THE MIRROR

「父さんが死んだ。葬式を挙げるから一度実家に帰って来い。」

姉から連絡がきたのは一昨日。僕は今日、およそ三年ぶりに実家に帰ってきた。

親父は考えが古風な上に堅物だったので、僕とは考えが合わなかった。そのため親父と喧嘩をすることが毎日あったし、大学生になって一人暮らしを始めるようになったときは、せいせいした気分だった。

僕は親父が嫌いなはずだった。はずだったのに、父が死んだと知った今、胸の奥になにか黒く重いものがあるように感じられた……。

三年ぶりに会った父は、棺桶の中、静かに横たわっていた。

親父、なぜ黙っているんだ親父  
俺、髪染めたんだぜ

親父、なぜ怒らないんだ親父  
見てくれよ、俺の服装

いつもなら、すぐ叱ったじゃないか  
髪を染めたりするんじゃないって  
そんなみつともない格好するなって

親父——…

突然熱いものがこみ上げ、堪らず僕は逃げるようにしてそこを離れた。

逃げ込んだ自分の部屋の中。顔を上げると、目の前に鏡。そこに写っている一人の男。僕は、心配して後をつけてきた母の方を振り返って言った。

「……母さん。俺、親父に似てきたね……。」

静かに、涙が頬を伝うのがわかった。

## 鏡

「八番セカンド、二条君。二条静夜君」

地区大会決勝、同点の九回裏二死三塁。体は自然と硬くなる。雫……お前なら平気か？

昔から雫の鏡だと同級生によく言われた。弱小野球部のホープと言われ一年生から四番セカンドだった天才に比べ、同じ卵子から生まれた俺は運動音痴。そっくりで対照なのだと。悔しくて、勝ちたくて。でも、いくら練習しても守備は上達すれどもバットが球に当たらない。いつしか打つのを「やめた」。毎日二百球を横に寝かせたバットに当てる変人扱いされたが、「犠打の二条」と呼ばれるようになった頃、俺は限定的にだが公式戦に出られるようになったんだ。

それなのに。何で足をなくすんだ、雫の奴！

今でも思い出す。奴の手術が終わった日の夜。「雫は生きてるじゃないか。骨肉腫で足を切っただけだ。永遠に勝てないわけでもない、雫より役に立つと言われれば良いじゃないか……」。ぶち壊れた涙腺に納得がいなくて、泣いて、泣いて、一晩中泣きはらして。夜が明ける頃、やっとわかった。俺は、雫に勝ちたかったわけじゃない。同じ土俵で野球をやりたいかったんだって。

非常識な監督らしい奇策だ。言われたっけ。雫の代わりは無理って。あの時はむかついたな。

「ピッチャー」

今は感謝してる。

「第一球を」

俺の力を抜いてくれて。

「投げました！」

雫。よく見とけ。

――俺は俺のやり方で戦ってみせる！

寝かされたバットを見て走ってくる内野手たちの隙を突き、球を投手の足元へ押し出した。打球は二遊間を転がりだめだ、ショートの方が速い！崩れながらのシッティングスローで返ってきた白球が、ファーストへと向かって……。

「~~~~~」

鏡の向「う」から声が聞こえる。見ると、そこにはベンチにいるはずの雫。俺より十分の一秒早く塁に「着ける」足で、まっすぐ進んでいる。

待ちやがれ！俺はお前が「休んだ」間……

「セ〜〜〜〜ンツ〜」

やっとお前に追いついたんだ！

ベースから手を離し、胸の土を払う。呆けた頭が正常に戻ったのは、観客が騒ぎ出す直前。間近で狂喜する声が聞こえてきた時だった。

「雫……？」

歓声の中、つけたての義足でコーチャーズボックスを跳ねる弟。監督のほうを見ると、むかつくくらいに嬉しそうだ。眼にまた熱いものが見上げてきた俺に、だきついて泣き叫ぶ雫。二人の間には、冷たい鏡なんて存在しなくて。

そこにいたのは、一組の双子だった。